

# 持続可能な異文化間コミュニケーションを目指して 一言語の対人関係機能面からのアプローチ

村田 和代

## はじめに

次の会話は、4月の初回授業時の学生同士(大学一回生)の会話である<sup>1</sup>。

(1)

ST1-1: Hello.

ST2-1: Hello.

ST1-2: *Eetto*. My name is Mika Arita. You.  
(Pause 5"00) My birthday is February 10.  
And you?

ST2-2: My name is Tomoko Kojima. My  
birthday is February 8. What, where is  
your hometown?

ST1-3: My hometown is Shimane, Matsue.  
Shimane. Your? You?

ST2-3: My hometown is Miyazaki. (laugh)

クラス全体に、ペアになってお互いの自己紹介を  
するよう指示したのだが、ものの数分もすればたち  
まち会話は終了していた。

続いての会話は、同じ学生同士の約3か月後の会  
話である。

(2)

ST1-1: Hi, (a) **Tomoko**. How are you?

ST2-1: Hi, (a) **Mika**. I'm fine, thank you, too.  
*Aa*. (e) **And you?**

ST1-2: Oh, I'm fine, too. (d) **Oh, it's a cute  
shirt. Is that a new shirt?**

ST2-2: Oh, thank you. (c) **I bought this last  
weekend.**

ST1-3: (d) **Oh, it's very cute.**

ST2-3: Thank you. I hear. (b) **I glad to hear  
that.**

ST1-4: By the way, what are you going to do  
this summer, (a) **Tomoko?**

ST2-4: I have games of *Kyudou* in summer  
vacation every Sunday. I'll go to  
Nagoya, Kobe, and on so. (c) **I guess it  
will very hard but I'll do my best.**

ST1-5: (b) **Really?** It's a very hard. I hope  
do your best.

ST2-5: Thank you. And when I come back  
to home, my Miyazaki, I want to go  
to sea and swim in the sea and do  
*Suikawari* by the sea.

ST1-6: (b) **Oh, great.** (c) **I like to swim in  
the sea and I want to do *Suikawari*,  
too.** (e) **Are you good at swimming?**

ST2-6: I belong to swimming club. (e) **And  
you?**

ST1-7: Oh, me, too.

ST2-7: (b) **Oh good.**

ST1-8: Let's go to the sea together.

ST2-8: (b) **Oh nice.** Go together.

ST1-9: Yes.

ST2-9: How about you, (a) **Mika?** (e) **Do you  
have any plan?**

ST1-10: Yes. I want to. I'm going to go to  
driving school in Shimane.

ST2-10: (b) **It's great.**

ST1-11: I want to get a driving license.

ST2-11: (b) **Hm.**

ST1-12: I'm looking forward to going to  
school.

ST2-12: Do your best. (laughing)

ST1-13: Thank you.

ST2-13: Have a good time, (a) **Mika.**

ST1-14: Thank you, (a) **Tomoko.** You too.

ST2-14: Oh, thank you. Good bye.

ST1-15: Good bye.

短期間で、格段に会話量は増え、会話の運びも自然なものとなっている。4月にはお互い慣れていないという点を勘案しても、この上達ぶりは、教員である私自身の予想をはるかに超えていた。一体、何がこのような効果をもたらしたのだろうか。

### ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー指導の試み

言語には、情報を伝達する機能のみならず、対人関係に関わる機能がある。英語教育と関連付けて考えるならば、前者に関しては、語彙や文法の学習がそれに当たるだろう。では、後者に関してはどうか。堀他(2006)は、日本の英語教育には、これまで情報伝達に関する項目に重点が置かれてきて、対人関係に関する言語項目については、あまり系統だっけ取り入れられてこなかった点を指摘している。

言語の対人関係機能面に関わる言語使用はポライトネスと呼ばれる<sup>2</sup>。日本語母語話者であれば、ポライトネスからまず敬語を思いつくだらう。しかし、ポライトネスはもっと広いスコープを持つ。敬語のように相手と距離を離すための言語ストラテジー(ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー)のみならず、親しさを表すような相手と距離を縮めるための言語ストラテジー(ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー)もポライトネスに含まれる。

敬語が体系化している日本語においては、相手と距離を離す言語ストラテジーが身近に感じられるが、英語では、逆に、相手と距離を近づけるような言語ストラテジーが頻繁に使用される。

これを取り入れて授業を行った結果が(2)の会話例である。この授業では、次のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを指導した(村田 2004; 村田・大谷 2005, 2006; 大谷 2007)。

#### (a) Address term

呼称を使用することで、相手との心的距離を縮める。

#### (b) Back channeling・emphatic response

あいづち、応答を入れることで相手の話題に関心を示していることを伝える。

例：“Oh. Yeah.” “Really?” “That’s great.” など。

#### (c) Answer with additional information

相手からの質問に対し、Yes, No だけの返答にとどまらず、もう一言コメントを入れることで、相手の質問により積極的に答える。

例：“Do you like sports?” “Yes. To tell the truth, I am a member of a soccer club.”

#### (d) Compliment

相手の持ち物や考えなどに好意的なコメントをし、相手への関心を示す。

例：“Oh, that’s a lovely T-shirt. I like it.”

#### (e) Showing interest

相手の話に更なる情報提供を求めたり、相手に問いかけることで、話に関心を持っていることを伝える。

例：“Do you like sports?” “Yes, I like to play tennis. How about you?”

#### (f) Hedge・softener

相手の意見に不同意の場合や、相手の誘いを断る場合は表現を和らげる。

例：“That’s a good idea, but ....”

授業は、前期のリスニングを利用した。教材として各ストラテジーについてA4サイズで1枚程度のプリントを作成し配布した。プリントには、モデル会話・解説・関連表現を記載した。そして、毎回授業の20分程度を使って、その日のターゲットストラテジーの提示・解説・会話練習を行った。指導する際には、より学生にわかりやすくするため「ポライトネス・ストラテジー」のかわりに「英語でのやり取りの仕方に関する知識」、「会話をスムーズにする方法」等の表現を使用した。

先にあげた会話例(1)と(2)を比較してみよう。(1)は会話の量は少ないが、言語の情報伝達の観点から見れば、必要な情報交換が行われていると言える。しかしながら、あくまでも必要最小限の情報のやり取りだけで、聞き手への配慮や話題への関心は示されておらず、自然な会話とはほど遠いものである。

一方(2)の会話はどうか。会話例中(a)から(f)は指導したストラテジーの使用箇所を示しているが、

学生は短期間にポライトネス・ストラテジーを習得し、それを使用している様子がうかがえる。そしてこれらのストラテジーの使用によって、質問に対してぶっきらぼうな答え方でなく付加的情報が加えられていることがわかる。さらに、返答に対しても、興味を示したり新しい質問で会話を展開したりしている。(2)は(1)と比較すると、相手に対する配慮を表し会話はスムーズに展開していると言える。

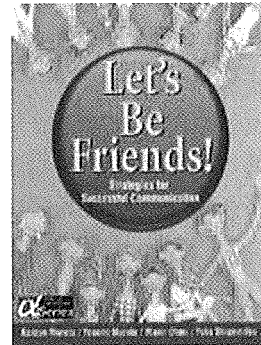
指導したストラテジーに含まれる言語表現は、どれも既習のものばかりであったが、学生はそれぞれの表現をばらばらで覚えていた。たとえば“*How about you?*”が「あなたはどうですか?」という意味で、“*What do you think about it?*”は「あなたはそれについてどう思いますか?」という意味であることは知っていても、これらのフレーズは、共通して相手に話をふることで相手に配慮し会話を進めるという対人関係に関わる機能を持つことは知らなかった。各ストラテジー指導時にフレーズ群を提示する際には、それらに共通する対人関係に関わる機能について演繹的に指導した。その結果、学習者は既習のフレーズ群を、有機的なつながりを持つ集合体として認識し直し、会話内でこれまで以上に活用できるようになったのである。

ポライトネス・ストラテジーの指導で、①話し相手に配慮する表現があること、②それらを使用することが重要であること、を学習者に「気付かせる」ことができた。この気付きにより、学習者は、相手に対する配慮を表しながらスムーズに会話を展開していくことができるようになったのである。

この実験授業の10か月後、同じ学生たちを追跡調査した(村田 2004)。この調査では、ポライトネス・ストラテジーの指導を受けた学生の英語会話と、受けていない学生(但し英語母語話者の先生の授業を受けたり英会話学校に通っていた学生)の英語会話を比較した。その結果、英語で頻繁に使われるポライトネス・ストラテジーを自然に使用している英語母語話者の先生に習っていても、意識的・明示的に指導されなければ、これらストラテジーを帰納的に習得することはないということが明らかになった。

この実験授業の効果が大きかったので、ポライトネスを研究する仲間と共に、本格的な英語テキストを作成するに至った。それが、*Let's be friends! Strategies for Successful Communication* およ

び、*Keep Talking: Strategies for Interpersonal Communication* (ともにマクミランランゲージハウス)である。これらテキストには、実験授業で指導したストラテジー以外の対人関係機能に関わるストラテジーも取り入れた。



### 問題点

実際に作成したテキストを使用して授業を行ったところ、新たな問題に直面することとなった。それは、英語で使用されるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを提示し、英語を話す際にはそれらができるだけ使用するよう指導すればいいのかという問題である。

たとえば、日本語母語話者にとって、相手を褒めるということ、時と場合、あるいは相手によっては、「へつらい」や「おべっか」というネガティブな意味を持つ。相手を褒めるということには慣れていないという学生も多く、complimentの指導は難しかった。また、感情を込めた emphatic response を使用する際、日本語でのあいづちと同じようにあまりに頻繁に使用するので、英語としては不自然な感じに聞こえるような場合もあった。学生の反応を通して、対人関係機能面に関わるストラテジーは、各言語文化の対人関係に関わる価値観が反映されているということを身をもって体験したのである。

英語は、いまやネイティブスピーカーの専有物ではなく、ネイティブとノンネイティブで、あるいはノンネイティブ同士で使用される国際語である。この点から考えれば、英語母語話者と同じように話す(ふるまう)べきであるとは言い難い。

### 持続可能な異文化間コミュニケーションとは?

「持続可能な開発のための教育 (Education for

Sustainable Development, 以下 ESD) 10年の実施が2002年第57回国連総会で決議された。ESDには、多文化共生社会における国際語としての英語による異文化コミュニケーションの育成もとりあげられている。国際的コミュニケーションの媒介としての英語を使って、効果的なコミュニケーションをするためには、英語圏の文化的背景を理解することは必要であっても、それがイコールその文化への同化を意味するのではない。相手と良好な関係を保ちながら、自己の文化的背景を失うことなく、それぞれが平等に誤解なく友好的にコミュニケーションを行う。これこそが、持続可能な異文化間コミュニケーションと言えるのではなからうか。

異文化間コミュニケーションで生じる誤解は、文法や語彙の間違いといった言語の情報伝達に関わる部分ではなく、実は言語の対人関係機能面に関わる部分に原因があるということがアンケートや異文化間会話の分析から報告されている(堀他 2006; Tsuda et al. 2007)。

私は現在、日本語・英語のビジネスミーティングを、言語の対人関係機能面から比較対照研究を行っている。実際に行われたビジネスミーティングの録画・録音データから、表面的にはまったく同じ言語的ふるまいであっても、対人関係に関して日本語と英語で異なる機能や役割を担うという例が見られる(例えば、ユーモア、スモールトーク、沈黙など)。もしこういった違いを知らなければ、実際の国際ビジネスの場で誤解が生じる可能性は高い。逆に、あらかじめ知っていれば誤解を避けることができるだろう。

平等でかつ友好的な持続可能な異文化間コミュニケーションを目指すためにも、英語教育で言語の対人関係機能面に目を向けてほしいと切に願う。まずは、学習者に、言語には対人関係の構築や維持に関わる機能があるという気付きを与えてほしい。そして、これに関わる言語ストラテジーを、英語のみならず、日本語との比較を通して、明示的に提示すべきであると思う。

持続可能な異文化間コミュニケーションへの第一歩は、自他の言語・文化の違いを認め理解することではないだろうか。

## 注

1. 会話中の氏名はすべて仮名である。又、文法等

の誤りを訂正せず話者の発言をそのまま記述している。

2. ポライトネス理論については Brown and Levinson (1987) を参照されたい。ポライトネス理論の概要は堀他(2006)で紹介されている。

## 参考文献

- Brown, Penelope, and Stephen Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代. 2006. 『ポライトネスと英語教育』ひつじ書房.
- 村田和代. 2004. 「第2言語語用能力習得に与える影響と効果—ポジティブポライトネス指導を通して—」『語用論研究』第6号, pp. 57-70.
- 村田和代・大谷麻美. 2005. 「日本人英語学習者への Positive Politeness ストラテジー意識化の試み」*The Language Teacher*, Vol. 29, No. 2, pp. 3-7.
- 村田和代・大谷麻美. 2006. 「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー指導の試み」堀素子他著『ポライトネスと英語教育』ひつじ書房. pp.195-228.
- 大谷麻美. 2007. 「英語コミュニケーション：聞き手と友好的対人関係を築くために」大学英語教育学会授業学研究会編著『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に—』松柏社. pp. 204-205.
- 大谷麻美・村田和代・村田泰美・重光由加. 2004. *Let's be friends!: Strategies for Successful Communication*. マクミランランゲージハウス.
- 大谷麻美・村田和代・村田泰美・重光由加. in press. *Keep Talking: Strategies for Interpersonal Communication*. マクミランランゲージハウス.
- Tsuda, Sanae, Yuka Shigemitsu, and Kazuyo Murata. 2007. Cultural awareness in teaching English: analysing intercultural communication and teaching positive politeness strategies. *The Journal of Asia TEFL*, Vol. 4, No. 3, pp. 161-185.

(龍谷大学准教授)